

---

# 性癖 平成 1 7 年 3 6 歳

藪 冬彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

性癖 平成17年 36歳

### 【Nコード】

N3478W

### 【作者名】

藪 冬彦

### 【あらすじ】

誰でも人に知られたくない、見られたくない性癖の一つは持っているものです。

それが想像や妄想の範疇に収め自分自身で昇華出来るかが、犯罪者になるならないの分岐点なのではないでしょうか。

それはまさに紙一重かもしれません。



## （前書き）

「私のような人間がなぜ生まれたのか、自分でも理解できない。二度と自分のような存在が生まれないよう、自分を研究材料にして欲しい」

前上博死刑囚は大阪地裁での公判でこう訴え続けたが、平成19年7月28日、その望みもかなわぬまま死刑が執行された。

この物語は、悪魔の性癖に魅入られた犯罪者の記録である。

夏休み前の幼稚園の授業風景。

「さあ みんな お父さんの似顔絵は出来たかな」と先生が子供達を見回した。

「では先生の方に見せてください」

子供達はそれぞれ描きあがった絵を頭の上にかざした。

ここは大阪府堺市の幼稚園だった。

「博君！お父さんの髪の毛って真っ白なの」と声を掛けた。

「うちのおとうちゃんは、白バイの警察官なんや」と胸を張って言う。

「お父ちゃんは悪人をつかまえるために働く正義の味方なんや」と言って先生を睨む。

「ごめんね 白いヘルメットだったん」と先生は感心した。

「かっこええなあ」と周りの園児たちが博の絵を見て呟いた。

前上死刑囚の父親は警察の白バイ隊員だった。

仕事が忙しかったこともあり、子供に向き合う時間はほとんどなか

ったが、戦隊もののTVキャラクターと同じように、博にとって父親はヒーローであり、思慕の念を強く抱いていた。

そしてその象徴でもあるヘルメットの白さに、強い印象と執着を幼児の脳幹に刷り込んだと思われる。

幼稚園が休みの日に、郵便配達員の白いヘルメットに興奮して後をついて回っていた。

小学低学年のときには、隣のクラスの担任がはく白いスニーカーに興奮し、その後一時的に性癖は収まったが、中学に入り、再び白いスクールソックスに異常な興奮を示すようになった。

何が彼をそこまで偏執させてしまったのか、時を遡ってみる。

小学校4年の時、家の中で突然、父親が博の腹の上に馬乗りになり、首を絞め上げた。

前上博はこのときの父親の能面のような血の気のない顔が忘れられないという。

またその直後に父親が飲酒運転で事故を起こしていたことを知り、「父は正義の味方ではなく犯罪者だったんだ」と思うようになった。

尊敬していた父親から虐待に近い暴力を受けた事に寄り、父親に対する感情が変化するきっかけとなる出来事だった。

きっと父親の癪にさわる何気ない悪戯か我儘を言ったのであろう、しかし父親の逆鱗に触れてしまったのだ。

これがトラウマとなり、人を窒息させることで、自分を父親に同一化させるようになったのではないかと後日、精神科医が分析している。

そして遂に欲望がエスカレートしてしまう。

小5から高校卒業まで、手のひらやエタノールを染み込ませたハンカチで、子供の口を押さえる犯行を約50件あまり繰り返していた。これだけでも十分異常なのだが、さらにもう一つの性癖があった。

「白い靴下」に対する執着心だ。

中学校1年の時に、教育実習生の女子大生がはいていた白いスクールソックスをみて強い性的興奮を覚えるようになった。

これも老若男女を問わなかったようで、白いソックスをはいた駅の清掃員を尾行したことも。

大学生のときは友人の男性を襲い首を絞める事件を起こし中退した。

その後派遣会社に勤務、勤務先の同僚を窒息、負傷させる事件を起こし逮捕。

2001年3月から6月にかけて、連続して通行人を窒息させるなどの傷害事件を起こし、執行猶予付き懲役刑の判決を受けた。

2002年1月ごろから、人を窒息させて殺害する内容の小説を自分で開設したウェブサイトに掲載。

窒息で苦しむ姿を楽しんだ後、殺害する行為を文章化することにより強い性的興奮を感じるようになった。

同年4月、中学生を窒息させる傷害事件で実刑判決を受け、服役した。

出所後、インターネットカフェで電子掲示板を閲覧するようになり、2004年12月ごろ、自殺志願者を募る自殺サイトを見つけ閃いた。

2005年2月19日午後、自殺サイトに投稿していた大阪府豊中市の無職女性（25）を呼び出し、レンタカーに乗せて同府河内長野市内の駐車場で白色ソックスをはかせて手足を縛り窒息させ殺害、近くの砂防ダム内の砂地に穴を掘り埋めた。

自宅近くのマンションのごみ箱などに、犯行に使った道具や女性の所持品などを捨てた。

5月21日午後、自殺サイトに投稿していた神戸市の男子中学生（14）を呼び出し、レンタカーに乗せ、白色ソックスをはかせ手足を縛り気絶させた。

和泉市の山中に移動し窒息させて殺害、遺体を山林に捨てた。

6月10日午後、自殺サイトに投稿していた同府東大阪市の男子大学生（21）を練炭こんろと木炭を準備して信用させ、河内長野市の山中へ移動。

大学生の手足を縛って気絶させ、白色ソックスをはかせた後、窒息



させ殺害。

遺体を遺棄し、現場近くに練炭こんろと木炭を捨てた。

前上死刑囚はなぜこのような犯行に及んだのか。

その理由こそ、「どうしても衝動を抑えることができなかった」と自ら告白する異常性癖だった。

「人が窒息して苦しむ姿に無上の興奮を得る」

この、他人には理解し難い性癖には、公判の被告人質問でも言及していた。

弁護士「人が窒息して苦しむ姿を見て性的に興奮するのか」

前上死刑囚「はい」

弁護士「それはいつごろからか」

前上死刑囚「小学4、5年のときから。推理小説に、犯人が薬品を染み込ませたハンカチで口をふさいで失神させて誘拐する場面があったて興奮した」

弁護士「自分以外の人もみんなそういう性癖だと思っていたのか」

前上死刑囚「はい。中2のころ、同級生がエロ本を見て興奮していて、初めて自分が人と違うと気付いた」

弁護士「相手は男でも女でもいいのか」

前上死刑囚「男女の区別は僕の中ではない」

弁護士「女性の裸を見て興奮したことは」

前上死刑囚「今まで一度もない」

最後にこの事件について、2チャンネルに投降されたあるスレッドを紹介します。

「処刑された前上は当然の報いだが、多分、自分一人では解決できない重い精神障害だったと思うと人殺しするまで何とかならなかったのかな？と思う。

人の首を絞めたり、白いソックスに興奮して幼児襲ったりしながらも、自分ではいけない事だとわかっていながら止める事ができず暴走したんだろう。

日本が精神医療の後進国と言うより世界中の精神医療で完全な医療をできないのが現実であるが、それならばアメリカみたいにこの手の変態を警察や市民が監視できる制度を作るべきだと思う。使い方を誤ると危険な制度だが幼児に悪さする変態と言うより性犯罪を起こす奴は更生は難しく常習性もあるから。」

誰でも人に知られたくない、見られたくない性癖の一つは持っているものです。

それが想像や妄想の範疇に収め自分自身で昇華出来るかが、犯罪者に成るならないの分岐点なのではないでしょうか。

それはまさに紙一重かもしれません。



（後書き）

2007年2月20日、検察側は「犯罪史上例をみない凶悪非道な犯行で、極刑がやむを得ないのは火を見るより明らか」と死刑を求刑。

同年3月28日、大阪地裁・水島和男裁判長は「犯行は冷酷で残虐非道。わずか4か月間に3人を殺害するなど結果はあまりに重大。特異な性癖は根深く、改善の可能性は乏しい」として、求刑通り死刑を言い渡した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3478w/>

---

性癖 平成17年 36歳

2011年11月11日18時12分発行